子供の教育的ニーズから考える
インクルーシブな環境づくり

―　教師の見取る力・支援する力の向上を目指した「シフトアップシート」の活用を通して　―

特別支援研究係
長期研修員　　小林　由紀

《研究の概要》

本研究は、「シフトアップシート」を活用して、支援を必要とする子供の行動分析と教育的ニーズに応じたインクルーシブな環境づくりを「見取りと支援の向上サイクル」に沿って定期的に繰り返すことで、教師の「見取る力」と「支援する力」が向上し、子供の行動変容につながることを実践・検証した。具体的には、子供の観察・分析を行い、対応の代替案や人的支援・物的支援・多様性を認め合う集団づくりのアプローチの支援を創出・実践した。その結果、教師の「見取る力」「支援する力」の向上と対象とした子供の成長に加え、支援の効果が学級全体に波及してインクルーシブな環境づくりが促進された。

キーワード　【特別支援教育　インクルーシブ　人的支援　物的支援　多様性　集団へのアプローチ】

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｉ０１−０１　令和６年度　２８５集

Ⅰ　研究のねらい

本研究では、特別支援研究係の研究テーマを受けて、「教員へのアプローチ」「支援が必要な児童生徒へのアプローチ」を研究の要素として取り入れる。研究のねらいは、「シフトアップシート」を活用し、支援を必要とする子供の行動分析と教育的ニーズに応じたインクルーシブな環境づくりを「見取りと支援の向上サイクル」に沿って定期的に繰り返すことは、教師の「見取る力」と「支援する力」の向上につながり、子供の行動変容を促すかについて明らかにする。

Ⅱ　研究の内容

１　主要な四つの視点

本研究の主要な考え方となる四つの視点を、以下のように位置付けた。

○　インクルーシブな環境づくり

子供を取り巻く環境を「人的環境」、「物的環境」の二つに捉え、社会の構造や環境が障害を生み出す「社会モデル」の考え方を踏まえ、インクルーシブな環境づくりに必要な要素を「人的支援」「物的支援」「多様性を認め合う集団づくりへのアプローチ」の三つに整理した（図１、表１）。これらを本研究の手立てである「シフトアップシート」の支援欄に設け、それぞれの要素に沿う支援の創出を促すことが、子供一人一人の多様性を認める学級づくりにおける具体的な方策になると考えた。

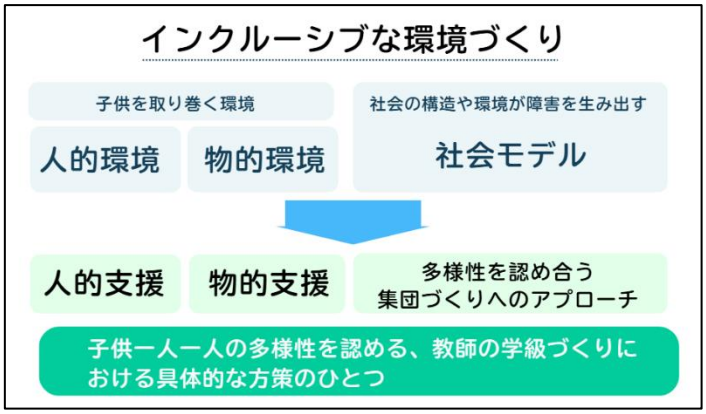

図１　インクルーシブな環境づくりの三つの要素

表１　三つの要素の観点

人的支援	教師の適切な関わりや支援員等の人的資源を活用する際の共通理解事項など 例：存在の承認、行動の承認、適切な指示の出し方・話し方・聞き方
物的支援	子供の生活や学習環境の充実、教育的ニーズに応じた適切な教材や設備など 例：環境の構造化、時間や指示の視覚化、活動の明確化、子供に合った教材・教具、ＩＣＴ機器、施設設備
多様性を認め合う集団づくりへのアプローチ	適切な行動の学習機会の提供、協働的な学習環境の構築、多様な学びのスタイルの尊重、社会的スキルの向上など 例：適切な行動や対処の支援、行動の選択肢を増やす支援、自己表現の促進、役割の多様化、多様な学びのスタイルの活用、他者理解と協力の促進

○　見取る力

教師が子供を適切に支援し、成長を促すためには、子供の状態や変化を的確に捉える「見取る力」が求められる。本研究では、「観察」「分析」「子供理解」「変容」の四つの観点を重視し、それぞれが教師の「見取る力」の向上にどのように関連するかを整理した（図２）。

「観察」は目に見える行動の変化や兆しから子供の事実を捉え、教育的ニーズや

図２　「見取る力の向上」の観点

支援の必要性を判断する基礎となる。「分析」は、観察した行動の背景にある要因を推測し、子供の困難さや適切な面を見極めることで、支援の方向性を明確にする。「子供理解」は、単なる行動の表面ではなく、子供の内面や考え、感じていることを深く理解することで、より適切な関わり方や支援の方法を検討する。「変容」は、短期的・長期的な子供の成長を継続的に見取ることで支援の効果を評価し、必要に応じて改善を行う。

○　支援する力

「見取る力」と同様に、教師の「支援する力」を高めることは、子供を適切に支援し、成長を促すために重要である。本研究では「代替案の創出」「支援の創出」「支援の実行」「支援の工夫」の四つの観点を重視し、それぞれが教師の「支援する力」の向上にどのように関連するかを整理した（図３）。

図３　「支援する力の向上」の観点

「代替案の創出」は、教師が自己の行動を振り返り、子供に伝わりやすい対応や関わり方を考えることで、より効果的なアプローチを見付けることができる。「支援の創出」は、人的支援、物的支援、多様性を認め合う集団づくりへのアプローチに分け、生成ＡＩを含めた多様な参考資料を活用し、個の教育的ニーズに応じた支援を生み出す。「支援の実行」は、支援を生み出すだけでなく、実際に行動に移すことで初めて意味をもつ。また、関係する校内の教職員と支援を共有し、一貫した対応を行うことも重要である。「支援の工夫」は、実行した支援の効果を子供の反応を観察して確認し、より適切で子供の教育的ニーズに応じた支援へとつなげるために求められる。

○　見取りと支援の向上サイクル

本研究では、「観察→方向づけ→決定→実行」を定期的に繰り返すことで、現在の子供の教育的ニーズに応じたより適切な支援の創出が可能となり、併せて教師の「見取る力」と「支援する力」の向上につながると考えた（図４）。

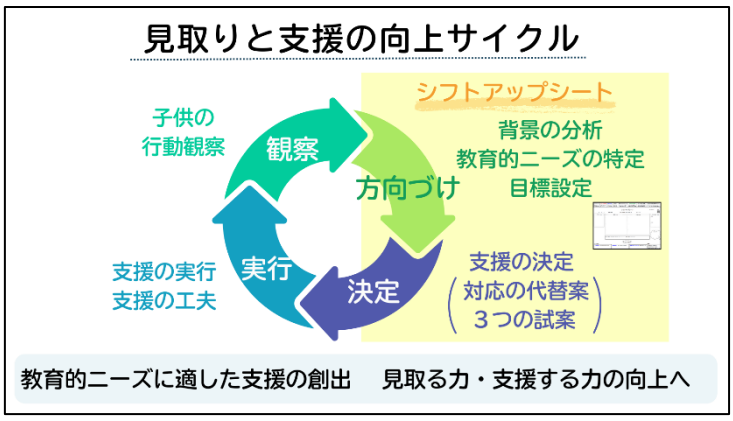

図４　「見取りと支援の向上サイクル」の内容

「観察」は子供の行動観察、「方向づけ」は背景の分析・教育的ニーズの特定と目標設定、「決定」は支援の決定、「実行」は支援の実行・工夫を指す。なお、「シフトアップシート」の作成は「方向づけ」と「決定」の部分を担う。

２　手立ての概要

本研究の手立ては、紙媒体ではＡ４サイズの表裏１枚、デジタル版ではＡ４サイズ２枚にまとめたもので、「シフトアップシート」（表面）および「支援のアイディア集」（裏面）で構成される（次ページ図５、図６）。コンセプトは「誰でも、簡潔に、分析と支援の創出ができる」ことであり、紙媒体１枚に内容を集約することで、教師が手軽に活用できるよう工夫した。対象児は、学級内で気になる子供や特別な支援を必要とする子供のうち、一人を抽出することを前提としている。教師が「シフトアップシート」の分析手順に沿って記入を進めることで、子供の見方や捉え方、支援のあり方に関する視点の切り替えが促されるよう設計した。この「シフトアップシート」を用いることで、教師の「見取る力」と「支援する力」が向上し、学級内の子供の見取りや支援に活かされ、子供たちの成長につながることが期待できる。

①エピソード	②真意の推測	③適切な面	④強み	⑤学んでもらいたいこと	⑥対応の代替案	⑦3つの試案/連携	⑧対応の代替案/試案のチェック
具体的なやりとり(会話/行動)	行動の真意/目的 例:「~かも?」	子供のエピソードで適切な面	普段の子供の強み、特性	★スモールステップで設定 (週間)の数字に○印	子供の強みを意識した教師のかかわりの代替案	「参考となる支援」を参照 支援の創出/連携の検討	□「学んでもらいたいこと」を学べそう? □「~できる」「先生/友達は仲間」を育めそう?

シフトアップシート

使い方ガイド　動画

月　日(　)　時間目 授業:　教室/ 特別教室 / 校庭 / 体育館 / 他　年・イニシャル

子供 の言動	教師 の対応	子供 の反応	子供の強み・特性
・	・ ・ ・	・ ・ ・	学習面 ・ 生活面 ・

ちょこっとメモ

★ この場面で子供に学んでもらいたいこと(2 ・ 3 ・ 4 週間で達成できそうなこと)
・

参考となる支援

〔3つの試案〕

人的支援	物的支援	集団へのアプローチ
認める、自己決定の場の提供等 ・	構造化、視覚的支援、支援具等 ・	多様性の認め合い等 ・

〔連携〕
□学年/校内で支援を検討
□外部専門家の助力を検討
□個別の教育支援/指導計画に反映

図５　シフトアップシート（表面）

参考となる支援　□校内で相談　□外部専門家に相談　□支援のアイディア集　□生成AI　□インターネット　□研修　□書籍　□その他

支援のアイディア集

人的支援(例)	
存在の承認	□名前を呼ぶ(名前+挨拶など) □関心を向ける言葉(体調、服装等)
行動の承認	□役割を設け「ありがとう」と伝える □プロセスを認める □当たり前にできていることを認める
指示	□短文、具体的な指示 □一度の指示の数(例:1~2つ) □全体像を示し、順序だてて出す
話し方	□Iメッセージ(先生は~だと思う) □穏やか/元気に話す(弱/強い刺激) □近づいて話す(距離に配慮)
聞き方	□まず子供の話を聞く □途中で口を挟まず、最後まで聞く

物的支援(例)	
物理的な構造化	□クールダウンの場所を設置 □刺激量の調整(視覚、聴覚) □座席の配慮(位置、黒板との距離)
時間や指示の視覚化	□視覚スケジュール 授業の流れ/日・週・月/本人専用 □時間量のわかるタイマーの使用 □筆談用のコミュニケーションメモ
活動の明確化	□いつ/どこで/何を/どれくらいの量/を文字や表、絵で明示
支援具	□実態に応じた支援具(リーディングトラッカー、フィジェットトイ等) □教科に応じた支援具(九九表等) □ICTの活用

集団へのアプローチ(例)	
教える	□失敗時の対処方法 □不適切な行為だと知らない時 □適切な行為を知らない時 □集団での助け合いの具体例
認める	□「わからない」を伝えられた時 □友達と助け合っていた時 □一人一人に与えられた役割の遂行時
その他	□多様な学習スタイルでの授業 (一人・ペア・グループ等) □学校/学級の暗黙のルールを明示 □お互いの違いのよさを価値づけ □お互いのよさ、強みを生かし合う関係 □お互いの弱みをフォローし合う関係

チェックリスト(群馬県の例)
通級による指導パッケージver.02【Ⅱアセスメントパッケージ】

支援の視点となるキーワード(例)

共通	見通し、感覚刺激の調整
ASD	納得感、こだわりの活かし方、視覚的支援
ADHD	動きのある活動、空白時間の対応
LD	物的支援の保障、代読、代筆
DCD	協調運動を必要とする活動への配慮

生成AI ・ プロンプト(例)
①学年　例:小学3年
②診断名・特性・強み
③「課題となる行動は・・・」
④「この場面で学んでもらいたいことは・・・」
⑤「支援を3つ教えて」

生成AI ・ シートの画像+プロンプト(例)
①シートの画像
②学年　例:中学1年
③「この場面で学んでもらいたいことは・・・」
④「支援を3つ教えて」

方向づけ ・ 決定
今回シート作成
月　日

定期的な繰り返しでスパイラルアップ
実行・観察　代替案 ・ 試案の検証

方向づけ ・ 決定
次回シート作成
月　日

図６　支援のアイディア集（裏面）

「支援のアイディア集」（前ページ図６、図８）には、子供の教育的ニーズに応じた支援を創出するための手立てを４種類に整理した。「人的支援・物的支援・集団へのアプローチ例」「実態把握のためのチェックリスト」「支援の視点となるキーワード例」「生成ＡＩを活用する場合のプロンプト例」であり、４種類を包括する手立ての名称として「支援のアイディア集」とした。これらは、子供との信頼関係の形成や特別支援教育の基本的な考えに基づき、簡便に参照できる支援例を掲載している。さらに、より教育的ニーズに応じた支援の創出のため、定期的な繰り返しを促す次回の「シフトアップシート」作成日の記載欄も設けた。なお、「シフトアップシート」と「支援のアイディア集」の解説資料も作成した（図７、図８）。

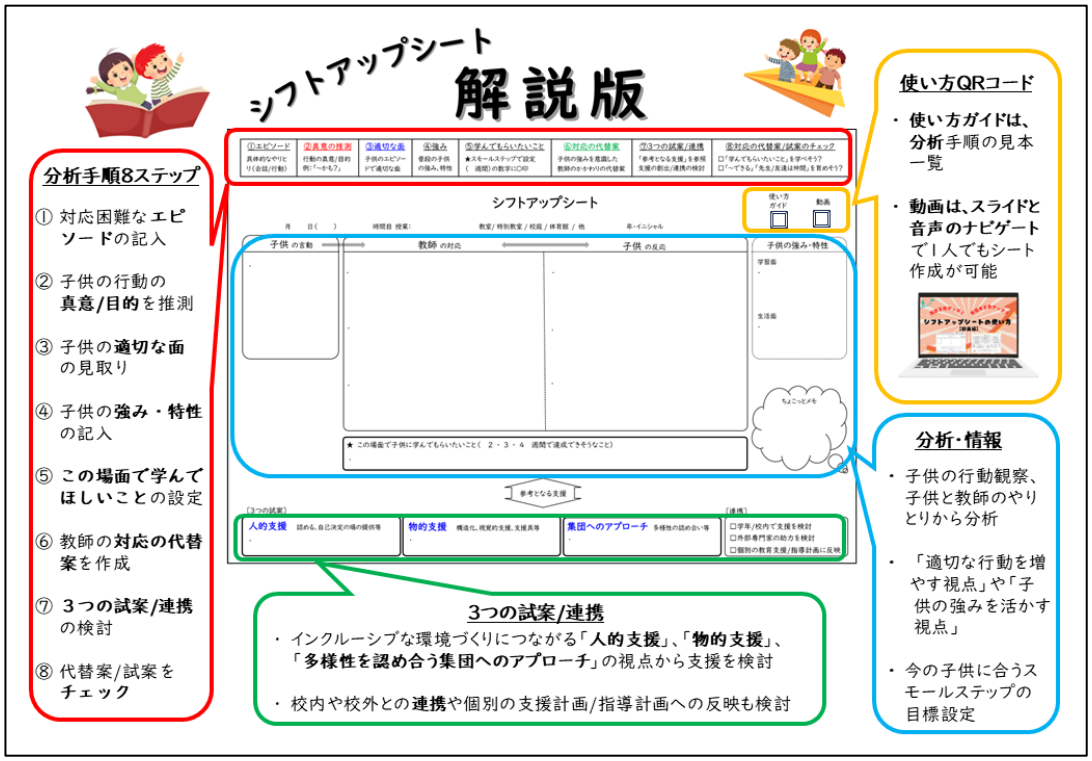

図７　「シフトアップシート」解説版

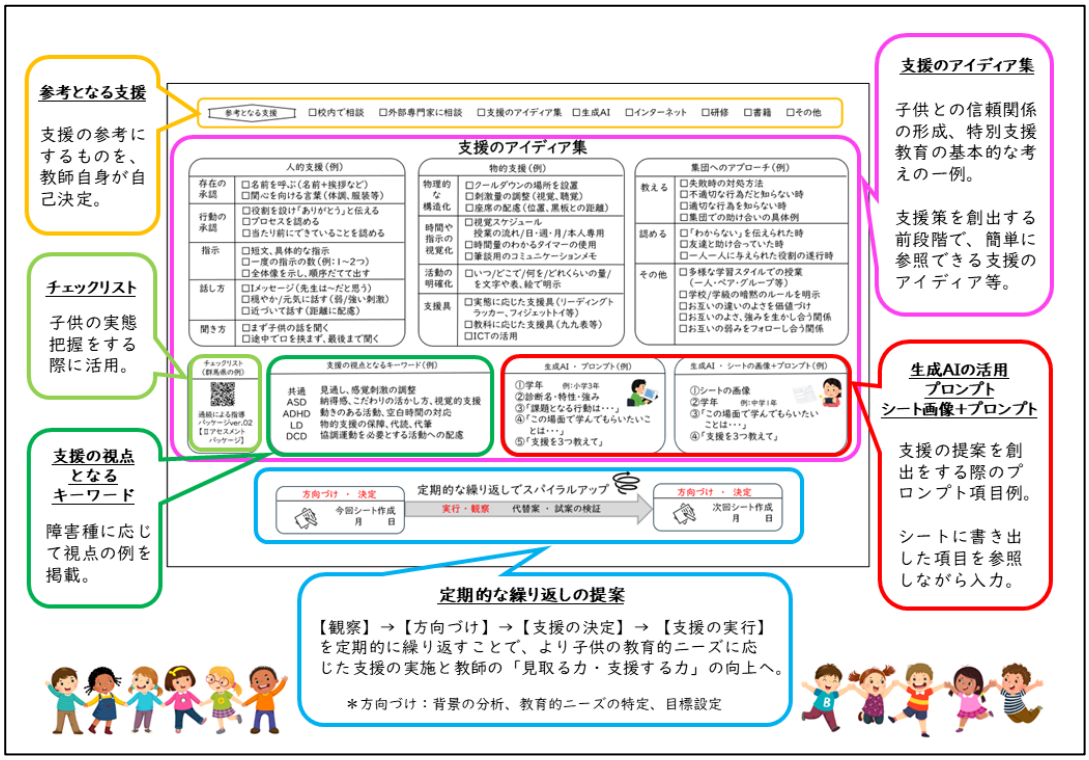

図８　「支援のアイディア集」解説

教師一人で作成可能となるように、「シフトアップシート」の書き方の手順を「分析手順８ステップ」で示した。併せて、「シフトアップシート」内にあるＱＲコードから「使い方ガイド」と「動画」の２種類のナビゲート資料を閲覧できるようにした。この手順で書き進めることで、教師の「見取る力」と「支援する力」の向上を図る構造とした（表２、次ページ図９、図 10）。

表２　手順の詳細

手順①	エピソード	子供の困難な状況、課題と思われる言動を書き、それに対する教師と子供の具体的なやりとりを２～３往復程度で「教師の対応」「子供の反応」に記載する。
手順②	真意の推測	子供の本当に思っていることや考え、行動の目的を推測し、「子供の言動」「子供の反応」欄に記載する。
手順③	適切な面	課題と思われるエピソードの見方を変え、子供の言葉や動きから、子供の強みやよさ、肯定的な面を見取り、「子供の言動」「子供の反応」欄から抜き出し記載する。
手順④	強み	普段の子供の強み、特性を記載する。
手順⑤	学んでもらいたいこと	達成の目安を決めて期限（２・３・４週間）を決定する。子供の実態より高くなりすぎないよう、子供が「私、できる」と自己効力感を感じられるものになるようスモールステップで設定して記載する。
手順⑥	対応の代替案	手順⑤で設定した「学んでもらいたいこと」を、子供が学びやすくするために、子供の強みを意識した教師の関わりの代替案を「教師の対応」欄に記載する。
手順⑦	三つの試案／連携	支援のアイディア集や生成ＡＩなどの「参考となる支援」を活用し、支援の試案を創出する。創出した支援は実行し、子供の教育的ニーズに応じているかどうかを確かめるため「試案」と表記する。また、創出した支援については、学年や学校全体での支援や外部専門家の助力を検討し、個別の教育支援計画や個別の指導計画に反映するなど、校内・校外での連携を検討する。
手順⑧	対応の代替案／試案のチェック	手順⑥「対応の代替案」と手順⑦「三つの試案／連携」が、手順⑤で設定した「学んでもらいたいこと」を学べる内容になっているか、また、教師の押しつけの支援になっていないかを、二つのチェック項目として設けた「『学んでもらいたいこと』を学べそう？」と「『～できる』『先生／友達は仲間』を育めそう？」の視点で確認する。

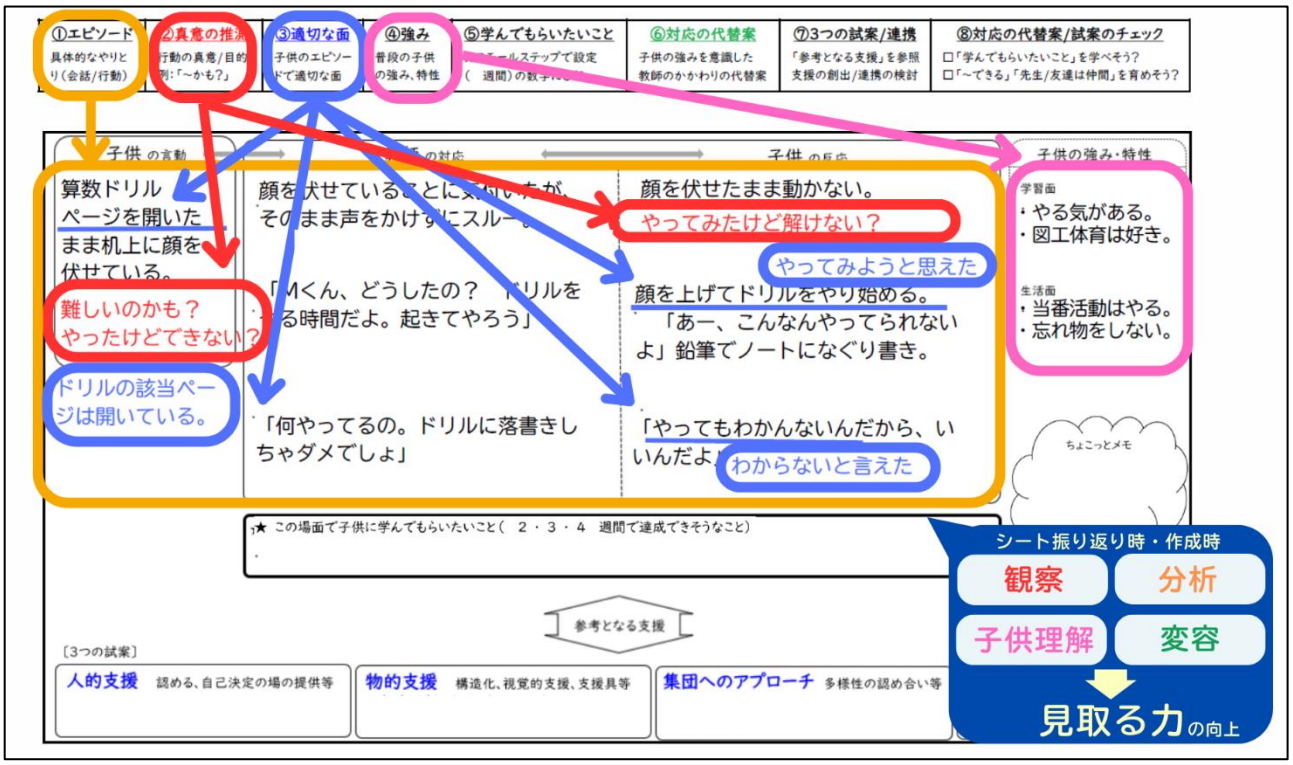

図９　「見取る力」の向上に関する書き方の手順

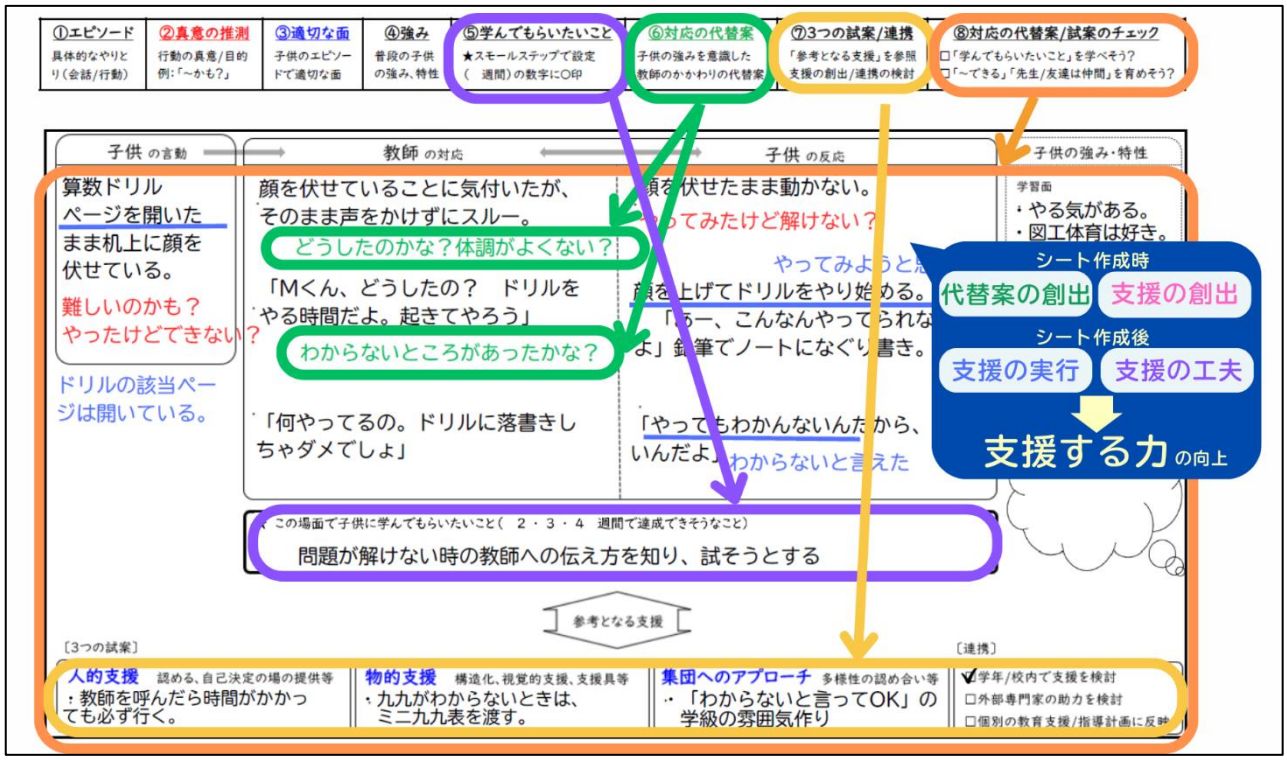

図 10　「支援する力」の向上に関する書き方の手順

Ⅲ　研究の計画と方法

１　対象

研究協力校の小学校１校、協力教諭３名、対象児４名

２　期間

令和６年９月５日～令和６年 12 月 20 日

３　方法

約２週間に１回、研修員が各学級の授業観察をし、協力教諭（以下、担任）が放課後に「シフトアップシート」を作成した。その際、研修員が担任に、対象児や学級の変容、教師の意識の変容についてインタビューも行った。作成後の約２週間、担任が支援の実行と対象児の観察を行った。これらを６回繰り返し行い、結果として各担任は６枚の「シフトアップシート」を作成した（図 11）。

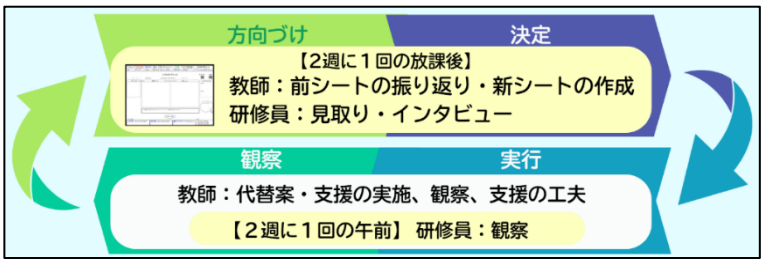

図 11　研究方法における「見取りと支援の向上サイクル」

なお、「２週間」は、支援の実行（支援具の準備を含む）・観察・支援の工夫の期間として設定した。

Ⅳ　研究の実践

１　実践の概要

本実践は、「シフトアップシート」を活用して、支援を必要とする子供の行動を観察・分析し、教育的ニーズに応じた人的支援・物的支援・多様性を認め合う集団づくりへのアプローチを繰り返すことで、教師の「見取る力」「支援する力」の向上と、学級のインクルーシブな環境づくりを目指した（図 12）。

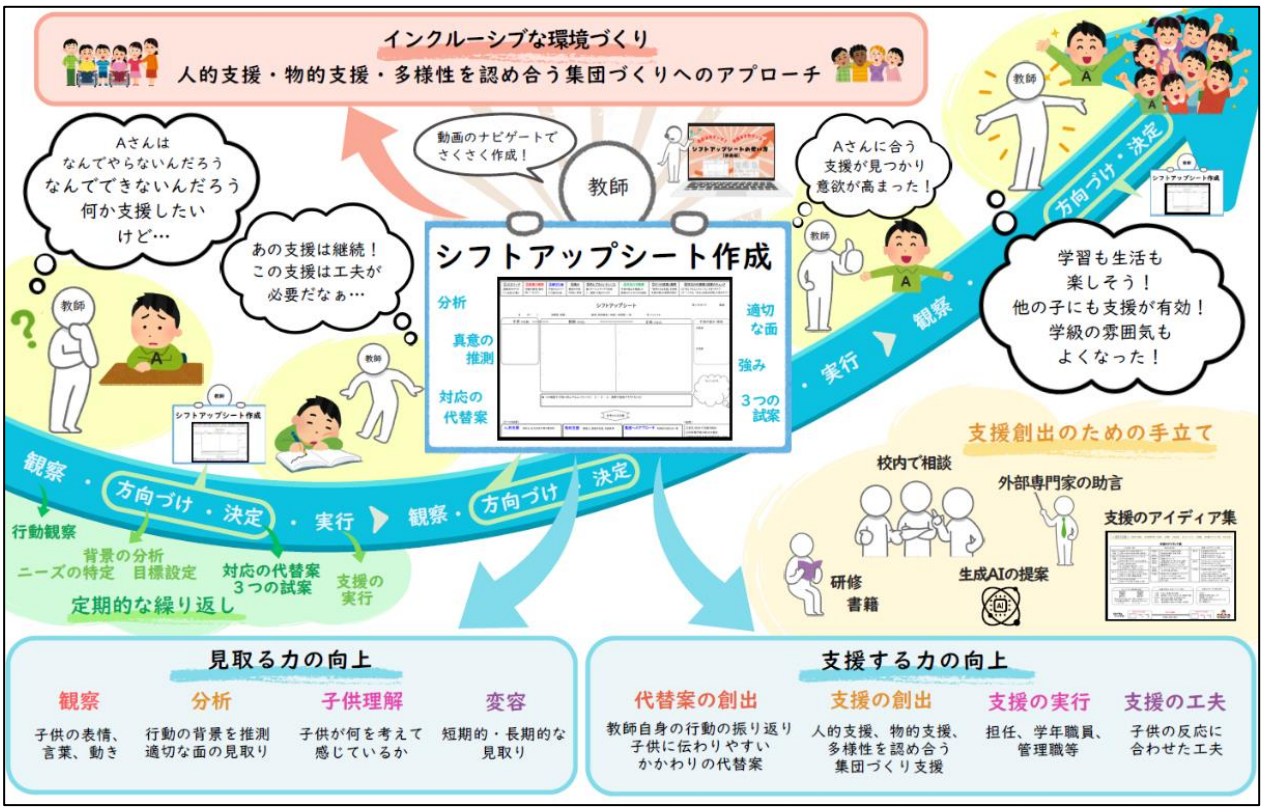

図 12　実践のイメージ図

２　「通常の学級で気になる子」への支援

本実践における「通常の学級で気になる子」は、医学的な診断名はないものの、学習面・行動面・社会性の発達などにおいて、通常の学級において教師の適切な支援を必要とする子供を対象とした。

実践開始時、対象児の気になる様子として、「ひらがなは読めるのに、声に出して教科書の文を読めない」「手悪さが目立つ」「椅子から立つ」といった点が見られた。これらの行動の変容と、６回の「シフトアップシート」の作成時における担任の見取りや支援の内容を整理した（図 13）。

３回の作成を通じて「校内での相談」「生成ＡＩの活用」「支援のアイディア集」を参考にしながら、担任が様々な代替案と支援を実施した。その約２か月後、声に出して教科書を読めなかった対象児が、小さいながらも口を動かし、声を出して教科書の文を読もうとしていたり、指を使って文字を追うようになったりする姿が見られた。また、読む行を分かりやすくして目の負担を減らす道具であるリーディングトラッカーを使いたい気持ちを「あれ、あれ」と担任に伝える様子もあった。そして、椅子から立ち上がることも少なくなった。

その後、更に３回の作成を経た約４か月後には、教科書の文を指で追いながら声に出して読むようになり、手悪さの道具となっていた鉛筆や消しゴムを自分から出そうとしなくなった。また、椅子から立ち上がることもほとんどなくなる様子が見られた。

このように、「シフトアップシート」の作成を含む「見取りと支援の向上サイクル」を定期的に繰り返し実践したことで、担任は対象児の変容を促すことができた。

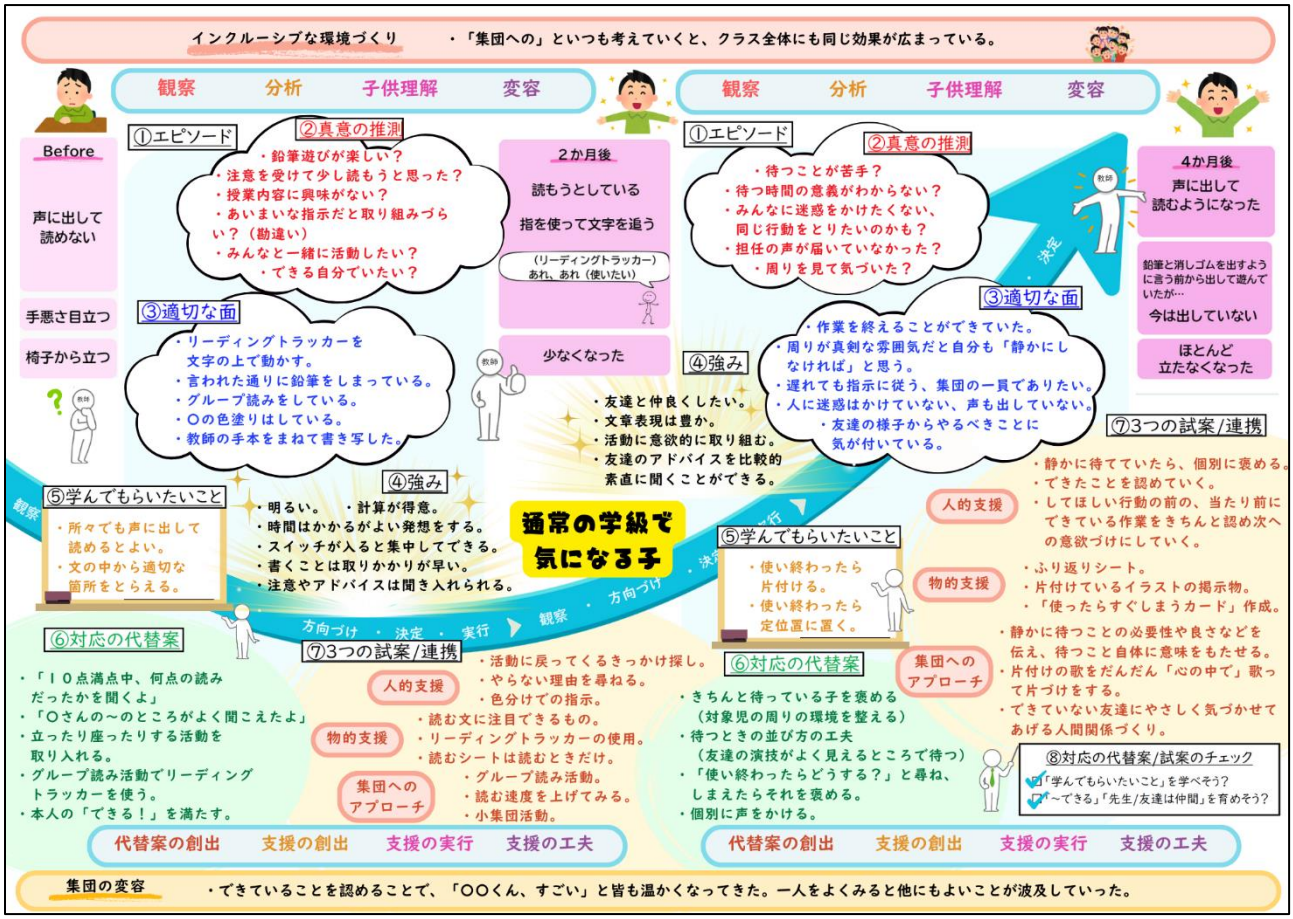

図 13　通常の学級で「気になる子」への支援の実践概要
（子供の変容：図の左から右へ、教師の見取りと支援：図の上から下へ）

３　「通常の学級で特別な支援を必要とする子」への支援

本実践における「通常の学級で特別な支援を必要とする子」は、通常の学級に在籍し、医学的な診断名

があり、特別支援教育の視点で適切な支援を行う必要がある子供を対象とした。

実践開始時、対象児の気になる様子として、「周りが気になり、離席が多い」「ノートを出さない」「困ったことがあっても『分からない』としか言えない」といった点が見られた。これらの行動の変容と、６回の「シフトアップシート」の作成時における担任の見取りや支援の内容を整理した（図 14）。

３回の作成を通じて「校内での相談」「生成ＡＩの活用」「支援のアイディア集」を参考にしながら、担任が様々な代替案と支援を実施した。その約２か月後には、対象児が離席しないように落ち着こうと努力する姿が見られた。また、「やりたいけれどできない」「後ろの席の方が集中してできる」と気持ちを担任に伝えられるようになり、それを受けて担任が座席を後方に変更する合理的配慮を行った。

その後、更に３回の作成を経た約４か月後には、対象児が自らノートを出せるようになり、離席する際も、担任の指示通りに板書をノートに書き終えてから行動するようになった。そして、全般的に授業に参加できるようになったという大きな成長が見られた。

このように、「シフトアップシート」の作成を含む「見取りと支援の向上サイクル」を定期的に繰り返し実践したことで、担任は対象児の変容を促すことができた。

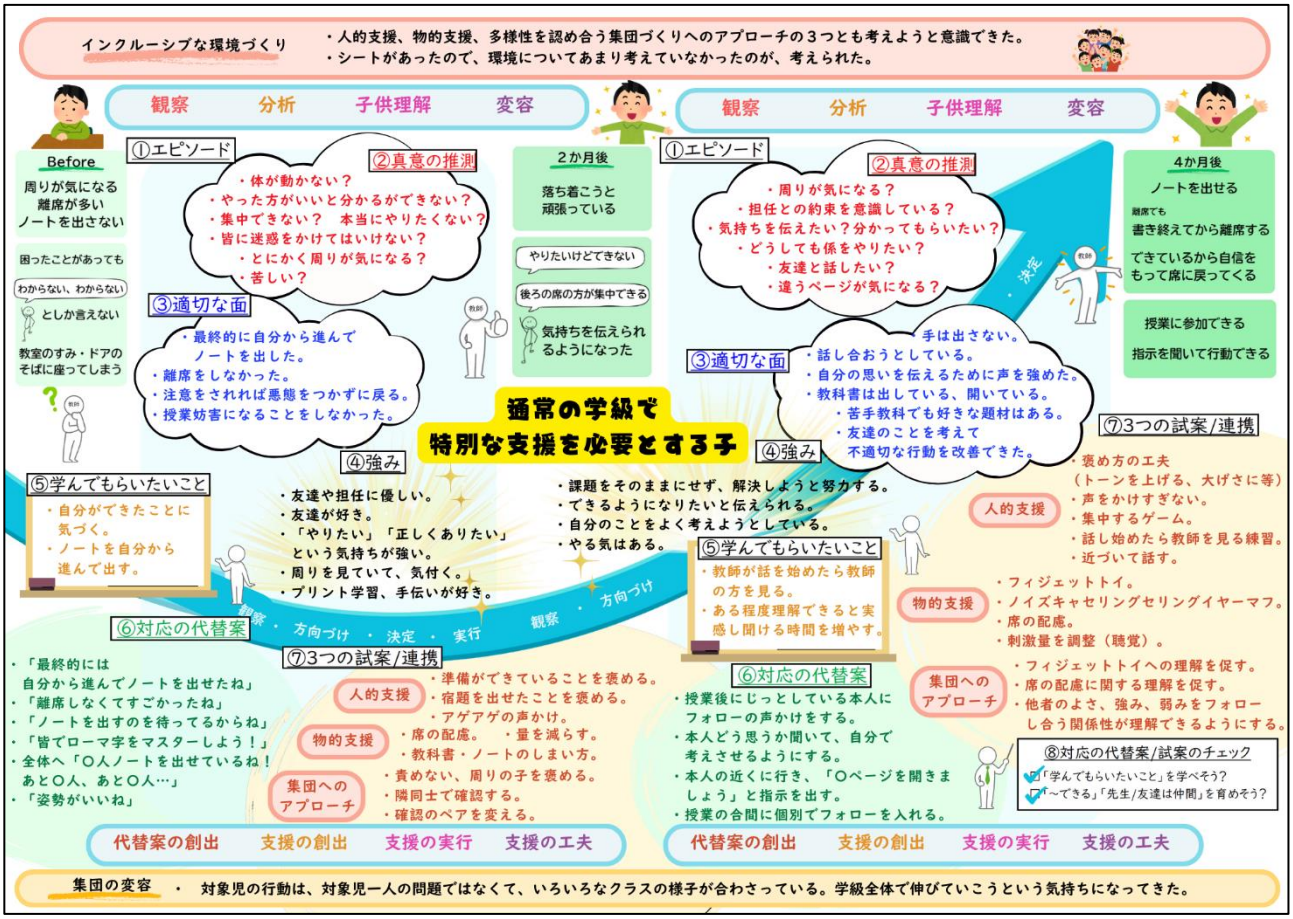

図 14　通常の学級で「特別な支援を必要とする子」への支援の実践概要
（子供の変容：図の左から右へ、教師の見取りと支援：図の上から下へ）

４　特別支援学級で「学習面・行動面に困難さのある子」への支援

本実践における「学習面に困難さのある子」は、特定の学習で困難さを抱え、教師の適切な支援を必要とする子供を対象とした。「行動面に困難さのある子」は、学習面においては適切な支援が行われ困難さはないものの、行動面や社会性の発達において困難さを抱え、教師の適切な支援を必要とする子供を対象とした。本実践は同一学級内の２名の子供を対象とし、実践期間の前半は「学習面に困難さのある子」、後半は「行動面に困難さのある子」の実践を行った。なお、「学習面において困難さのある子」の実践

については、物的支援の創出・実行・工夫が中心の実践となった（図 15）。

「学習面に困難さのある子」は、実践開始時、数字・数詞・数量の知識や理解など「数に関する困難さ」が見られた。「シフトアップシート」での分析と「校内での相談」「生成ＡＩの活用」の支援の提案を通じて、教育的ニーズに応じた支援具を担任が複数作成し、授業に取り入れた。支援具のうち、対象児の実態に合うものは継続して活用し、合わないものは担任が工夫しながら改良を重ねた。その結果、対象児は支援具を活用しながら自ら学習に取り組めるようになり、意欲も向上した。

「行動面に困難さがある子」は、実践開始時、「言ってはいけないことを、つい言ってしまう困難さ」が見られた。「シフトアップシート」での分析や支援の実施を通じて、担任は対象児が単に「よい言葉を知らないだけ」ということに気付き、学級全体で「よい言葉見付け」の学習を行った。この学習が対象児に合い、自らよい言葉を意識して使おうとしたり、悪い言葉を口にしたときには自分の口に手を当てて言わないようにしたりする様子が見られた。また、この学習は学級全体にもよい影響を与え、学級の子供たちが、よい言葉を使うようになる結果にもつながった。

このように、対象児に応じたそれぞれの「シフトアップシート」の作成を含む「見取りと支援の向上サイクル」を定期的に繰り返し実践したことで、担任は対象児たちの変容を促すことができた。

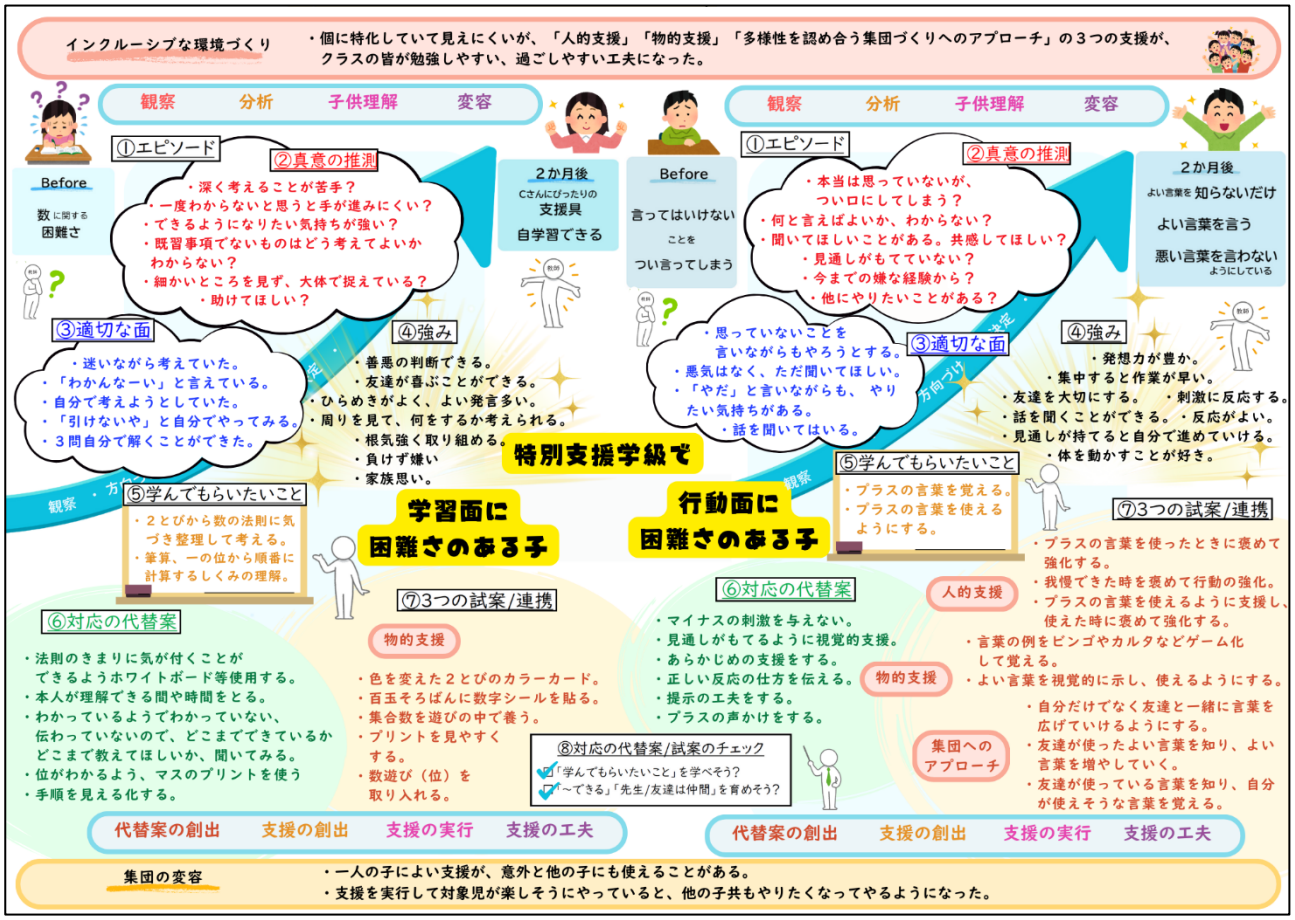

図 15　特別支援学級で「学習面に困難さのある子」（左側）「行動面に困難さのある子」（右側）への支援の実践概要（子供の変容：図の左から右へ、教師の見取りと支援：図の上から下へ）

５　実践の成果

対象児の「個の変容」、対象児が在籍する学級における「集団の変容」、「教師の見取る力・支援する力」、「インクルーシブな環境づくり」、「生成ＡＩの活用」の五つに、成果をまとめた。

○　個の変容

・　「シフトアップシート」を活用した行動分析から、４名それぞれの子供の教育的ニーズに応じた

支援を実行したことにより「教科書を指で追って声に出して読むようになった」「『やりたいけれどできない』と言えるようになった」「支援具を使って自学習ができるようになった」「よい言葉を使えるようになった」などの個の成長が見られた。

・　通常の学級の２事例では、面談時に保護者へ変容を伝える際、「シフトアップシート」の記録を活用し、学校での対応、具体的な支援、子供の変容を伝えたところ、保護者はその変容に驚き「家庭でも支援を取り入れてみようか」という話題が出るなど、子供の支援について保護者と共通理解することができた。

○　集団の変容

以下にある教師へのインタビューと見取りから、個へのアプローチと集団へのアプローチは相互に影響し合い、個が成長することで学級集団も成長したことが示された。

〔教師へのインタビュー・見取り〕

・　できていることを認める支援が功を奏し、対象児に対して学級の他児たちが温かい言葉をかけるようになった。
・　一人を支えることで、クラス全体にもよい波及効果が生まれることが確認された。
・　教師が対象児に気を配ることで、学級全体が「みんなで伸びよう」という気持ちにつながった。
・　対象児が楽しんで学習している様子を見て他児も学習したくなり、学級全体の学習に広がった。

○　教師の見取る力・支援する力の向上

以下にある教師へのインタビューと見取りから、教師自身が「シフトアップシート」を活用してより深い子供理解と教育的ニーズに応じた支援を行ったことで、子供の変容が見られ、教師が自己の「見取る力」と「支援する力」の向上を実感していることが示された。

〔教師へのインタビュー・見取り〕

・　問題行動の背景にある“困り感”に目を向けるようになった。
・　「やらない」のではなく「できない」という視点で見取るようになった。
・　「強みを活かした代替案」を考えるようになった。
・　対象児の“思い”に気が付いた。
・　「シフトアップシート」の作成が教師自身の行動を振り返るきっかけになった。
・　子供の行動の真意や目的を考え冷静に対処できるようになった。
・　課題と思える行動があった際には、「こういうときは、こう対処すればよい」といった心持ちで対処できるようになった。
・　子供にとって適切な支援か、支援者として自分に向いている支援か含めて実行・工夫した。
・　「シフトアップシート」の分析部分と支援策を見返しながら実践した。
・　「シフトアップシート」の作成により行動を視覚的に捉えて対策を考えられ、ふと気が付いたときに支援をする行動につながった。
・　支援をやってみてうまくいかないとき、違う方法でやってみた。
・　普段なら注意してしまう場面で、「シフトアップシート」に書いた代替案や支援を思い出して、やってみた。

○　インクルーシブな環境づくり

以下にある教師へのインタビューと見取りから、環境づくりを「人的支援」「物的支援」「多様性を認め合う集団へのアプローチ」の三つの要素に分けて検討したことで、明確で多角的な支援の検討と実施ができ、インクルーシブな環境づくりにつながったことが示された。

〔教師へのインタビュー・見取り〕

・　集団へのアプローチを意識することで、クラス全体に同じ効果が広まった。
・　三つの要素はインクルーシブには必要であると教師が認識し、この視点を通じての環境づくりに対する具体的な行動につながった。

・　支援が個に特化しているように見えても、実は学級全員が学びやすく過ごしやすい工夫へとつながっていた。

○　支援創出における生成ＡＩの活用（令和６年 12 月時点）

本研究では、支援創出の手立ての一つとして複数の生成ＡＩを活用し、その有効性を検証した。最終的には Gemini および特別支援教育用に研究されている生成ＡＩを用いて分析を行い、以下の三つの観点から有効性をまとめた（表３）。

表３　生成ＡＩの有効性と活用のポイント

提案性	Gemini は「シフトアップシート」の画像を読み込む機能を備えており、プロンプトの入力情報が少なくても教育的ニーズに応じた支援の提案を得られる利点があった。一方で、紙に人間が自筆で記入した場合、「シフトアップシート」上の手書きの文字の認識が不完全である場合も見られ、課題が残ることが確認された。
専門性	特別支援教育用の生成ＡＩは専門用語を用いた提案を行うため、用語を理解する必要のある専門性を有していた。一方で、Gemini は障害特性に応じた基本的な支援策を提案する傾向があり、特定の専門領域に関しては特別支援教育用の生成ＡＩの方が具体的な提案を行っていた。使用者や使用目的に応じて、適切な生成ＡＩを選択することが求められる。
支援する力	生成ＡＩの種類の選別と活用については使用者の好みによるが、生成ＡＩからの提案は参考情報として捉える必要がある。「シフトアップシート」で得られた分析結果を踏まえ、教育的ニーズに応じた支援策を適切に選択し、それをどのように学校生活に落とし込んで実行していくかが重要である。

生成ＡＩを活用することで、支援創出の効率化や質の向上が期待できることが示された。一方で、活用する技術や特別支援教育に関する専門性の違いを考慮しながら適切な生成ＡＩを選択し、実践に活かす工夫が求められた。また、生成ＡＩの活用については、文部科学省の「初等中等教育段階における生成ＡＩの利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）」を必読の上での活用が必要である。

６　考察

本実践において、「シフトアップシート」の活用が教師の「見取る力」と「支援する力」の向上に寄与したことが明らかとなった。

まず、「シフトアップシート」の作成を通して、教師は子供の行動を多角的に捉えることができるようになり、より適切な視点で子供の様子を見取り、深く理解するようになった。特に、教師が子供の行動の真意や変容を的確に把握することは、教育的ニーズに応じた支援の第一歩となり、結果として「見取る力」の向上につながったと考えられる。加えて、教育的ニーズに応じた支援の創出と実行が可能となり、教師の「支援する力」の向上も見られた。多角的な支援の視点をもったことで、多様なアプローチを検討・実行することができた点は、支援の幅を広げる上で重要であった。これにより、子供一人一人に適した支援の在り方を柔軟に考え、実践する力が養われたと考えられる。

また、人的支援・物的支援・多様性を認め合う集団づくりへのアプローチの三つの要素の支援を「シフトアップシート」の作成の度に考え、実行していくことで、支援の効果が学級へ波及し、子供同士の理解や関係性が深まり、インクルーシブな環境づくりにつながった。

さらに、「シフトアップシート」は、教師と保護者の連携においても有効に機能した。教師が「シフトアップシート」の記録をもとに子供の変容や支援内容を具体的に保護者へ説明することで、保護者の子供理解が深まり、支援の方向性について共通理解を得ることができた。このように、「シフトアップシート」の活用は、子供の支援のみならず、家庭との協働を促進するツールとしても有効であったと言える。

以上のことから、「シフトアップシート」の活用は、教師の「見取る力」と「支援する力」を高めるとともに、インクルーシブな環境づくりや保護者との協働を強化する手立てとして有用であると示された。

Ⅴ　研究のまとめ

１　研究の成果

○　「見取りと支援の向上サイクル」に沿った定期的な繰り返しの実践を通し、教師の「見取る力」と「支援する力」が向上し、支援がより適切かつ先送りせずに行われ、結果的に子供や集団の成長につながった。

○　「人的支援」「物的支援」「多様性を認め合う集団づくりへのアプローチ」である三つの要素の支援が学級へ波及し、子供同士の理解や関係性が深まり、インクルーシブな環境づくりにつながった。

２　研究の課題

○　「シフトアップシート」の手順において、手順⑥「対応の代替案」を書き出してから手順⑦「三つの試案／連携」を検討する流れとした。「シフトアップシート」を作成する手引きとなる動画を作成し、動画に沿って書き進める場合は、手順に沿って分析を行えた。一方で、作成に慣れて動画を見ずに分析手順のみを見て作成する場合は、手順⑦・手順⑥の順で書いてしまうことがあった。作成するときの思考の流れから、分析手順を見直す必要があった。

○　生成ＡＩを使って支援を生み出す際、研修員が担任のサポートをして画像の読み込みをしたりプロンプト入力を行ったりした。生成ＡＩの利活用の点から、支援創出の手順の中に組み込んでいく必要があった。

３　今後の展望

本研究では、「シフトアップシート」の活用が教師の「見取る力」と「支援する力」の向上に影響し、支援を必要とする子供の行動変容や学級全体のインクルーシブな環境づくりに効果をもたらすことが示唆された。今後は、以下の２点が展望として挙げられる。

○　校内における支援体制の強化と学校づくりへの活用

校内での相談体制の活性化や特別支援教育の専門家との連携を強化し、より効果的な支援策を共有する仕組みが必要である。特に、校内研修で「シフトアップシート」の活用を取り上げ、教師間での事例共有や支援策の見直し・練り直しを行うことで、学校全体の「見取る力」と「支援する力」の向上につなげることができる。また、支援に関する成功事例や課題を定期的に共有し支援を蓄積し引き継いでいくことで、子供が安心して生活できる学校づくりにもつながることが期待される。

○　ＩＣＴや生成ＡＩの活用による支援の効率化

生成ＡＩを活用した支援策の充実や、デジタル版「シフトアップシート」の活用により、教師の負担を軽減しながら支援の幅を広げることが期待される。特に、子供の特性に応じた支援策を校内で創出するための技術活用が期待される。

以上を踏まえ、今後は「シフトアップシート」の活用を軸にしたインクルーシブな環境づくりの継続的な改善と、より広範な教育現場での活用を期待したい。特に、校内研修を通じて教師の「見取る力」と「支援する力」の向上を促し、実践的な知識の共有と支援方法の見直しを進めることで、学校全体の課題解決力を高め、誰もが安心して過ごせる学校づくりにつなげることが重要である。

＜参考文献＞

・　飯野由里子・星加良司・西倉実季（2022）　『「社会」を扱う新たなモード「障害の社会モデル」の使い方』　生活書院

・　青山新吾・岩瀬直樹（2019）　『インクルーシブ教育を通常学級で実践するってどういうこと？（イ

ンクルーシブ発想の教育シリーズ②）』　学事出版
・　清野雅子・岡山恵実（2018）　『ほめない、しからない、勇気づける　３歳からのアドラー式子育て術「パセージ」』　小学館
・　青木高光（2024）　『わかる、できる、伝えられる、ように…教室の中の視覚支援　場所・時間・活動を構造化しよう』　明治図書
・　文部科学省（令和６年）　「初等中等教育段階における生成ＡＩの利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）」